

# 共催事業 資料展示「イペの花の下の被爆者： 広島県医師会に寄贈された在ブラジル原爆被爆者協会資料の紹介」

広島大学 原爆放射線医科学研究所 附属被ばく資料調査解析部 助教 久保田 明子

## 1. はじめに：過去の展示に関するご報告と謝辞

2023年度にご支援をいただいた資料展示「イペの花の下の被爆者」の報告に入る前に、まず、放射線災害・医科学研究拠点（以下、拠点）への、これまでのご支援についての謝辞を申し上げたいこと、特筆したいことを述べさせていただきます。

原爆放射線医科学研究所（以下、原医研）附属被ばく資料調査解析部（以下、解析部）の企画展示は、小さく稚拙ながらもこれまで8回を数え、拠点には2017年度の展示「爆心地から生きる：近距離被爆生存者の医療をたどって」から共催をいただき、その都度「ニュースレター」に報告をしまっていました。

展示に対しての反響は、やはり直後に、そのときの展示に関してのものをいただくことが多いのですが、本年度（2024年度）は少し様相が違い、過去の展示について、大学生・大学院生から研究に関連した問い合わせを以下のように3件いただきました（以下、問い合わせ順）。

- (1) 鳥取大学の学部生…2021年度展示「赤レンガの医学資料館」 ※卒業論文研究
- (2) 東京外国語大学の大学院生…2023年度展示「イペの花の下の被爆者」 ※博士論文研究
- (3) 東京大学の大学院生…2022年度展示「被爆者を生き抜く」 ※博士論文研究

3人とも本件のためにわざわざ原医研を訪問し、筆者と面会しました。特に、(1)と(3)は、拠点の「ニュースレター」を読んだの問い合わせでした。どなたであっても展示に関する反応や感想をいただくことは大変有難く、勉強になります

が、今年は、こういった大学・大学院での研究のなかで参考にされた、ということが珍しかったです。彼女たちの研究はそれぞれ、軍都広島 of 歴史研究、被爆者問題研究（在外被爆者問題）、被爆に関する個人情報についてのデジタルアーカイブ研究です。個人的には、よく過去の展示のことやニュースレターまで見つけ出してくださった、との驚きと感謝を持ちました。インターネットによって過去の展示の成果が検索されやすい／情報が残る、という環境の現在、医学研究所からの「歴史的なこと」の社会発信もまた、医学研究には直結せずとも、何らかの貢献になる可能性があるのかと感じます。これも、拠点の共催のご支援とニュースレターへの報告掲載のおかげです。心より御礼を申し上げます。また、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

\*\*\*

以下は、放射線災害・医科学研究拠点に多大なご理解を賜り共催していただきました、2023年度の資料展示「イペの花の下の被爆者」について報告します。

## 2. 広島県医師会への在ブラジル原爆被爆者協会資料の寄贈と展示

原爆被爆者のなかで、被爆後日本を離れて海外に暮らす被爆者の総称を「在外被爆者」と呼びますが、彼らは在外ではない被爆者とはまた違った苦勞があり、国からの援護の点で言えば、在外と

いうことでかなり長い間十分な支援を受けることがありませんでした。そういった在外被爆者たちは、もはや自ら声を上げ、支援者とともに援護の訴えをする運動を根気強く進めていきます。その先導は在韓被爆者であり、それに続いていったのが、在米被爆者（北米・南米）でした。韓国（朝鮮半島）や北米の被爆者に比べればその数は少ないですが、ブラジルを始めとする南米被爆者たちの動きは、そういった運動の中でカギとなり、援護を勝ち取っていく重要な要因となります。その南米被爆者の、いわばとりまとめ的な立ち位置となっていたのが「在ブラジル原爆被爆者協会」でした。この創立者の一人であり、会長となったのは森田 隆氏です。森田氏は当時憲兵で、広島で被爆しましたが、特に、当時広島に滞在していた朝鮮王族の李鍋を助けたことでも知られています。1956年にブラジルに移住したのち、1984年に同協会を設立し、在南米被爆者のために力を尽くしました。惜しくも、本年（2024年）8月にサンパウロで、100歳で逝去されました。同協会はずっと森田氏の営む店「SUKIYAKI」が事務所となっており、まだ森田氏をご存命であった2023年春に、この協会の資料は広島県医師会が受贈しました。

広島県医師会が本資料を受ける背景は何であったでしょうか。被爆者団体は、重要ではあるものの、その性格から、医師会が受ける、ということは結びつきにくいです。しかしながら、ブラジルの場合は、医師会との縁がありました。在外被爆者が医療の援護を受けることが長くないなか、広島県医師会は、広島県、また広島大学医学部（第2内科）、原医研、放射線影響研究所などと協力・連携して、まずは北米を含む在米被爆者への医師団派遣事業を立ち上げます。そのなかでブラジルを中心とした南米の被爆者への事業の必要性を強く意識し、彼らとの交流が始まりました。そして

それは、鎌田 七男広島大学名誉教授などを含む多くの広島の医師たちが関与しました。そうして始まった南米への医師団派遣事業が素晴らしいのは、単発でそれを行ったのではなく、ずっと今もその事業を継続している点です。「外国で被爆者が日本の医師に医療を受ける」というハードルは大変高く、在外被爆者の望むような十分な医療は困難です。しかしそれでも、北米は1977年から、南米は1985年から現在も継続するということは、医師会のかなり強い熱意と固い意志がないと可能ではなく、それは先方の被爆者の皆さんにも通じているに違いないはずです。そういった固いつながりがあるなか、2021年に解散を決めた在ブラジル原爆被爆者協会は、その資料の行き先に広島県医師会を望みました。当時その担当をされたのは同会の渡辺 淳子氏で、診療を含めて懇意であった鎌田 七男先生が間を取り持つ形で、広島県医師会の意気もあって、資料は広島に「里帰り」することとなります。資料群はSUKIYAKIとマジックで書かれた日本酒「白鶴」の箱に入ってやってきました。そして、原医研解析部では、その「里帰り」の過程から携わらせていただきました。（ちなみに、現在日本酒の海外輸出労で国内トップを走っている「白鶴」が海外へ初めて出たのは、1900年のパリ万博です。同社は戦後からは特にMade in Japanにこだわり、海外に製造拠点を設けていないと言います。ということは、あるとき日本からサンパウロに向けて海を渡ったこの「白鶴」の箱も、今回「里帰り」したことになります。）

南米ブラジルから資料を引き受ける、というのは、思った以上に手数が多く、サンパウロの渡辺 淳子氏に大変な苦勞を背負わせてしまいました。しかしながら、筆者がメールでやり取りする分には、いつも南米的な明るさがあって、そのやり取り自体は大変楽しくも感じました。そうして2023年3月20日の朝8時に関西空港を經由して、



その午後には原医研に資料箱6箱が到着します。その後、燻蒸作業や基礎的な整理を行い、2023年4月10日に、広島県医師会でセレモニーを行い、正式な受贈となりました。そして、その後も原医研解析部で資料の整理と分析を行い、2023年8月6日、広島県医師会館の「被爆伝承コーナー」にて展示を開始します。原医研解析部では、その展示準備を担当させていただきました。

### 3. 展示計画

2023年の広島原爆忌から始まった展示は、立地も展示環境も大変優れた広島県医師会館で行われることで、その関係性からも、社会発信としても、広島県医師会の行事としてふさわしく、また寄贈者のブラジルの皆様も大変に喜ばれた様子でした。ただ、医師会館の展示スペースは当時限られており、多くを説明するのは難しいものでした。先に述べたように、在外被爆者の問題は、医療面だけでなくそのほかの被爆者団体としての活動といった社会的側面も、また「在外被爆者問題」の面としても重要であるうえ、ブラジルという遠い外国での被爆者の皆さんの活動をもう少し広く広島で発信したい、という気持ちも筆者にはありました。広島大学 医学部 医学資料館でもし展示ができるとすれば、展示資料数や説明パネルをもう少し増やせるということから、また、寄贈手続き、燻蒸作業、資料整理の過程からお付き合いさせていただいている関係から、広島県医師会に願い出て、原医研の企画として展示を計画することとしました。広島県医師会の松村 誠会長の深いご理解・ご高配のもとその計画はご許可を得ることができたので、2023年度の展示としました。

タイトルは「イペの花の下の被爆者」としましたが、イペの花というのは、ブラジルの国花です。何色かありますが、特に黄色が好まれ、国の花とされているのもこの色です。これは木に咲く花で

あり、小ぶりの可憐な花を多数つける様子から、日本人移民には、日本の国の花「桜」のイメージと重ねて、「ブラジルの桜」として親しまれたそうです。そのため、ポスターのデザインにもこの花を採用しました。



図1

日本の移民政策（海外移住政策）は古く明治時代からスタートしますが、特に広島県は多く移民を輩出した県「移民県」としても知られています。そのため、このイペの花は、ブラジルに渡った日本人移民、また広島県出身者の移民が、望郷の思いを込めて見上げたのだろうか、と少し感傷的にも思いました。そして、その中にほんの少数派として存在した被爆者もまた、思いを馳せたのだろうか、と、その心中を思いました。この部分は決してセンチメンタルな思いばかりでなく、この、明治時代から形成されていた、独特に発達を遂げている既存の日本人移民社会に、後発として、原爆体験というある意味「特殊な」体験をした極少数派が入っていく、ということを少し考えるだけでも、見上げるイペの花は、また違った重みがあったのではないかと、企画時点から襟を正す思いでした。「イペの花の下の被爆者」というのは、日本移民史（広島移民史／南米移民史）という意味でも、在外被爆者の苦悩という意味でも、とにかく多面的に日本の現代史として見つめなおさなければならぬ、そしてそれらに、どう広島医学が対応したか、

都道府県別海外移住者数 1885-1972年		
順位	都道府県	移住者数(人)
1	広島県	109,893
2	沖縄県	89,424
3	熊本県	76,802
4	山口県	57,837
5	福岡県	57,684

出典：広島市デジタル移民部

図2

## 在外被爆者数 (厚生労働省調べ) 2007年3月現在

\*本表は「被爆者健康手帳」  
を取得している被爆者の  
数となる。

出典：  
平野伸人編著『海の向こうの被爆  
者たち：在外被爆者問題の理解  
のために』八月書館、2009年よ  
り作成

No.	国名	人数	No.	国名	人数	No.	国名	人数
1	韓国	2,893	13	フィリピン	6	25	北朝鮮	1
2	アメリカ	966	14	パラグアイ	5	26	ギリシャ	1
3	ブラジル	157	15	マレーシア	5	27	スウェーデン	1
4	中国	63	16	イギリス	5	28	ニュージーランド	1
5	カナダ	34	17	シンガポール	4	29	ブルネイ	1
6	オーストラリア	22	18	タイ	3	30	ベトナム	1
7	台湾	15	19	スイス	3	31	ペルー	1
8	アルゼンチン	12	20	メキシコ	3	32	ベルギー	1
9	インドネシア	9	21	オランダ	2	33	ポルトガル	1
10	ポリビア	9	22	香港	2	34	モロッコ	1
11	ドイツ	6	23	アラブ首長国連邦	1	35	イタリア	1
12	フランス	6	24	ウルグアイ	1	36	不明	32
							総計	4,275

図3

は振り返られねばならない問題ではあると考え  
ます。今回は、小さい展示ではあるものの、そう  
いった意義を見出していきたくと企画を検討しま  
した。

#### 4. 資料内容

寄贈資料は小さめの段ボール箱6箱程度でした  
が、内容は非常に充実しています。特に、日本で  
は入手しづらい資料や同会固有の資料など（例え  
ばブラジルサンパウロ発行の新聞、ニュースレ  
ター、既に解散してしまっている被爆者団体の関  
連資料、在ブラジル原爆被爆者協会の運営資料、  
広島医師団訪問に関する原本資料など）は大変  
貴重です。在外被爆者援護の裁判関連資料は予想  
以上になく、これは恐らく協会ではなく、個人に  
付帯して保存・管理されているためではないかと  
推測しています。なお、今回の展示は、主に広島  
の被爆者を中心としたものになりましたが、当然  
ながら長崎の被爆者の皆さんの資料もあります。  
そういった点で、今後この資料の詳細な分析をす  
る際は、その視点に留意する必要があります。在  
ブラジル原爆被爆者協会は1984年に設立されま  
したが、それ以降のポルトガル語による新聞記事  
や出版物などは、恐らく日本では見るのが難し

いものが多いのではないかと考えます。すべて  
が希少で重要ですが、そのなかでも特に重要なコ  
レクションとして「在南米原爆被爆者調査」があ  
ります。

#### 5. 在南米原爆被爆者調査

…（前略）…日本は今、大国となり世界各国へ  
の借款、難民救済、その他に多額の援助をし  
ておりますが、海外に居住する被爆者は、国  
内の被爆者とも差別され医療手当もありません。

現在南米諸国は最悪の経済事情下に有り、日  
本から巡回医師団が派遣され、要治療の被爆  
者が居ても、日本に帰国治療することは勿論、  
移住国内での医療費にも事欠くような状態で  
ございます。…（後略）…

1988年秋、在ブラジル原爆被爆者協会が南米  
各地に散らばる被爆者の皆さんに届けた調査用紙  
の表書きに、協会の理事長であった森田 隆さん  
はこう書きました。この部分の少し上には、この  
調査書を被爆者の支援のための大事な資料とす  
る、とも記しています。このことから、この調査は、



在南米の被爆者の実態を明らかにし、深刻な医療の不安を含む様々な問題点を洗い出し、少しでも解決につなげることを目指したものと考えます。

この調査によって、実際その目的がすべてうまく果たせたかは判断が難しいです。しかし、無駄ではなかったと考えます。広島以南米被爆者への健診事業は1985年から開始されましたが、これによって被爆者には医療への安心と期待・希望が少しもたらされました。また、被爆地の医師たちはその使命の重みを実感したでしょう。その流れでこの調査は実施されますが、その結果によって、今度は健診に訪れる医師たちにも状況がわかりやすくなり、被爆者に何が必要なのかも更に理解しやすくなったはずです。

太平洋は広く大きく、越えるのは容易ではありませんが、越えて行って被爆者と医師が出会い、「お国言葉」で話す、体調や病気の相談をする得難い大切な時間を、この調査は裏打ちしたと考えます。

調査は、1988年、ブラジル、ポリビア、アルゼンチン、パラグアイ、ペルーの南米5か国の被爆者188名に対して協力を求めました。内訳は、男性90名、女性98名で、年代は、明治生まれが7名、大正が50名、昭和が129名でした（うち不明（回答なし）が2名いた）。返送を受け、翌1989年3月にまとめられました。回答は139名あり、約75%の回答率でした。今回の寄贈資料には、上記の調査票がすべて含まれています。筆者は、展示にあたり、このコレクションについて一部解析を試み、パネルで提示しました。また、原本はガラスケースに、入っていたSUKIYAKIサイン入りの日本酒「白鶴」の箱とともに展示しました。

また、この南米被爆者に対する調査票は、北米の被爆者団体の調査票を参考に作られていることがわかりました。南米分は先に述べたように129

名ですが、在北米被爆者は、例えば1980年代は8,000名を数えました。もしその際の調査票があれば、それもまた貴重ですが、残念ながら北米の被爆者団体の調査票は、団体の分裂などもあって、まとまって残っていないと予想します。しかし、分裂せずに全うしたブラジルのほうに北米の調査票のブランクの原本が残ることでその経緯を知ることでもでき、また129名と少数といえども、1980年代後半の、在外被爆者援護問題が大詰めを迎えるころのアンケートがあることは、研究分析の可能性を考えても、とても貴重です。個人情報、プライバシーの問題は大変留意せねばなりません。いつか本コレクションについて、広島県医師会の了承を得て、本格的な深堀の調査研究を実施するプロジェクトが計画されることを願います。

## 6. 展示開催

大変希少な資料の展示ということで、いろいろな方の来訪が見られました。マスコミ報道も、NHK広島のニュース番組のほか、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、中国新聞が記事を掲載して下さったので、反響が広がりました。ただ一方で、いろいろな分野、立場から注目を集めるテーマだったことで、展示閲覧が平日月曜日～金曜日の10時～16時のみということに関しては改善を求める意見を頂戴しました。これは実際毎回必ず言われることですが、今回は、特に遠方から来訪したい方々にとっては大変厳しい、ということでした。

また、今までの展示と違って、法曹界関係（弁護士、判事、裁判関連の方）や在外被爆者支援をされている方、また広島の日伯協会の方などが来て下さいました。これは、在外被爆者に関しての問題の多様性の反映と考えます。こういった方々は、数度足を運んで下さったり、友人・知人に宣伝して下さったりするなど、大変好意的

に接していただき、またご挨拶した際には重要なお教示をいただくことができました。これは、展示企画者としての醍醐味です。また、広島県医師会の方も足を運んでいただき、巡回展をしたらよいのでは、と、大変温かいご意見まで頂戴しました。

今回医学資料館で展示するにあたり、筆者は、いわゆる広島平和記念資料館のような「被爆者」、「被爆の実相」を非常に強く中心に据える展示というよりは、それを大事にしながらも、「医学者・医師は彼らにどう関わったのか」という医学的要素を如何に出すか、ということになるべく考えました。例えば、原爆被爆の展示の場合、そのほとんどは、主語が被爆者となります。それは当然でもあります。本展示では、そういった被爆者に「医学者・医師はどう向き合っていたのか」という側面を少しでも出したい、と考えました。実際は十分ではなかったと思いますが、被爆の展示を見慣れている方々からは、そういった「医学的視点が加味された展示」について、良くも悪くも違和感があって面白かった、というような感想をいただきました。

例えば、在外被爆者の医療援護は長く不十分で、広島から医師団が南米に派遣されても実際の「診察」までは難しいなどの現実があります。それを語る時、「被爆者は…」と語ることがほとんどでしょう。そんな難しい状況の中で医師団の派遣の

道を切り開き、不十分ではあるかもしれないが何とか在外被爆者の医療や研究を進めようとする、広島県医師会、また医学研究者などの不屈の努力は、全く言及されなかったり、場合によっては安易に、ときに見当違いな批判を受けることもあります。それを少しでも解消できないものかと目論みました。実際、そういった医師たちの行動について、当事者の被爆者側から「不足である」「対応が悪い」と言われればその通りなのかもしれませんが、医師や医学者は決して怠惰だったのではない、ということをもっと知られても良いのではないか、と考えました。

そしてこれは、社会の科学リテラシーの問題、科学と社会の問題として、現在の問題でもあります。今回の展示ではその意識を持って企画しましたが、現在はまだうまく行っているとは言い切れません。この経験を今後の企画にも生かしていきたいと思うと同時に、やはり、科学と社会、特に原爆（核、原発、放射線災害）の医学においては、非常にデリケートで、ELSI（Ethical, Legal and Social Issues：倫理的・法的・社会的課題）の深い検討が必要であると、本展示の企画・運営のなかで強く感じました。本年2024年は広島大学150周年、来年2025年は被爆80年と、大きい節目の年が続きますが、この経験を生かした展示を、これからも計画していきたい所存です。